リトル・チルドレン

野良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リトル・チルドレン

【Ｎコード】
Ｎ１３９５Ｋ

【作者名】
野良

【あらすじ】
あの色素の薄い男の子は、なぜだろう、私の全てを見透かしていた。

雨足

この喫茶店のコーヒーは本当にまずくなった。
大変味が薄い。
口の中に流し込むと、舌の上でお湯と苦いお湯の二層に分かれた。
学生時代に咲子と飲みにきていたときはもっとおいしかった気がする。
いや、もしかしたらコーヒーの味なんてそのときは分からなかったのかもしれない。

さっきからずっと、隣のテーブルの客は不愉快な音をたて続けている。
ぴちゃぴちゃとコーヒーを飲み、ちゃぷちゃぷと味わっている。
そしてがたがたたんとキーボードを叩くのだ。
それが私の鬱状態をひどくする。

掃除がいき届いていない喫茶店の窓から、外の風景が見える。
安定したリズムで、雨がコンクリート街道を打ちつけている。

雨の日なんて、大概の人は憂鬱になるものよ。

大昔に相談を受けてもらったカウンセリングの先生はそう言った。

でも違うのだ。
全然そんなんじゃない。
私のこれは、全然そんなんじゃないのだ。

もちろん、彼女に全て打ち明けることなんてできなかった。

原因なんて、自分が一番よく知っている。
他人の誰も知りようのない、私だけの秘密。
私と、もしかしたら彼だけの秘密。

カウンセリングはすぐにやめた。
母は精神科のお医者さんに本格的に診てもらったらと言ったけど、
聞く耳なんてもたなかった。

これはそういう病気じゃない。
支配だ。
いつまで経っても慣れない、支配。

彼の影が離れない、永遠に。
色素の薄い、あの影が。

月夜の怪物たち

春休み明け初日の学校は、ざわざわと騒がしい。
いくつになってもこの空気は苦手だ。

各々の教室の黒板には新しい学年とクラスを指し示す用紙がマグネットで固定してあった。

高校二年生。
私と咲子は違うクラスになった。

「あー・・・」

黒板の前で咲子がきゅっと眉根を寄せてみせる。

「別々になっちゃったね」
「・・・うん」

「・・・でもさ」
「うん」
「時々梓のクラスにも遊びにいくから」

「うん」

ありがとう、と私はそれから小さく付け足した。

私と咲子は親友だ。

幼稚園、小学校、中学校、高校と全部一緒。
家も近所。

幼馴染、そして親友だ。

咲子は私なんかとは全然違う。

私は本物の根暗で、しゃべってみてもおもしろくない。
だから友達だって限られてくる。

自分と似ている子を探し出してきて傷をなめあうことしかできない。
そのこと自体には気づかないふりをしながら。

咲子は明るい。
楽しいし、頼りにもなる。

この学校は咲子の友達であふれかえっている。
私なんかとは全然違う友達で。

だから、どうして私なんかといてくれるのか理解できない。
もっと違う人とつるんでいた方がきっと得なのに。
多分、私のためなのだ。

優しい、優しい、とても優しい咲子。

五月にはいると、私と咲子が所属している広報委員会はぐっと忙しくなってくる。
一ヵ月後にひかえた学園祭のポスター、パンフレットづくり、そしてそれの配布。
いつもは地味で暇な広報委員会にスポットライトが当てられる時期なのだ。

先輩方が引退したあと、咲子が委員長になった。
私はずっと前からきっとそうなるだろうと思っていた。
私は咲子に言われた単純作業をこなすだけの平委員。
咲子よりずっと気が楽でいられる。

申し訳ない気持ちが起こってしまうほどに。

その気持ちが作用しているのだろうけど、帰り道に日課となってきた咲子の愚痴は黙って聞いてあげることにしている。

近頃では完全下校時刻ぎりぎりまで残って仕事を片している。月が出ていた。

「池上さん、口うるさいだけで仕事できないじゃない？全部こっちのせいにされると全体のモチベーションも下がってくるのよね」

「そうだねー。私もたまに言葉がきつくてずきんとくるよ」

「やっぱり？梓もそう思う？まあ、皆彼女のことはよく思ってないみたいだけど」

「アトサ、フクセイトカイチョウノセキネサンモ。カノジョ、ホラ、シンケイシツデヒステリックナヒトダカラ、ケッコウアツカイコマルノヨネー」

「ダイイチ、ムラカミクンガイチバンナッテナイトオモワナイ？セイトカイチョウノクセニタヨリガイガナクテ」

「アズサガハナシキイテクレテ、ホントウニウレシイ。セイトカイ

シツジャコンナハナシ、オオッピラニデキナイデショ？」

咲子の吐き口になるのは非常に楽だ。

私は咲子の感謝の言葉を述べられるほど、役割を果たしてはいない。

暗澹たる月夜。

街からコンクリートの壁やら棒やらがぬっと生えていて、まるで街全体がこの世で最も恐ろしい怪物みたいだと思った。

優しい、優しい

文化祭前日。
最も、広報委員会がてんてこまいになる日だ。

この日は一日が校内の飾りつけにあてられる。
私たちは各出し物をアピールするためのポスターを抱えて学校中を散策する。

今日ばかりは他の委員会の委員たちも広報を手伝ってくれる。
「手が空いたら広報の方へ」なんて指示が生徒会室で出されている。
いつもは雑用ばかりしている広報委員にとっては、なんだか奇妙で愉快な光景だ。

「一通り終わったね」
がらんとした生徒会室で椅子にどかっと座りながら咲子が言った。
仕事がなくなった人たちは下校していた。

「明日まわるところ、梓もちゃんと考えててよ」
「うん」

「去年みたく、咲子にまかせるじゃ嫌だからね」
「うん、分かってる」

私にそんなことを言いながら、咲子は散らかった生徒会室の机の上に無造作に置かれた文化祭のパンフレットをぱらぱらとめくった。

「今年は我ながらいい出来ね」

「明日、来校した人全員にそれが配られるんだね」
「そうねー」

「・・・咲子のおかげだよ、全部」

「えー？」

「咲子のおかげで、ここまでできたんだと思う」

咲子はにっこりして、梓も頑張ってくれたからだよと言った。
「うん、ありがとう」

このやりとりが一番の咲子の好物だってこと、私はよく知っていた。

「あの、寺先輩、鹿島先輩」

振り向くと春ちゃんがいた。
ころころとひとなつっこい笑顔で、タッパーの容器を突き出していた。

「これ、昨日つくったんです。よかったらどうぞ」

ころころとしたクッキーが、いっぱいに入っていた。

「ありがとう、春ちゃん。春ちゃんクッキーとかつくるんだー」

咲子が一つつまみあげて口に放り込んだ。

「いつもつくるわけじゃないんですけど・・・。昨日料理教室してる叔母が遊びに来てたんで、習ってつくってみました」

「おいしいよー。私もつくり方習いたーい」

春ちゃんの頬が染まる。

照れたように少しだけうつむいて言う。

「先輩、今日までおつかれさまでした。明日、きっといい文化祭になると思います」

邪気がない。
邪気がない。

邪気ってそもそもなんだろう。
きっと私そのものだ。

春ちゃんを見ていると、私は理由もなく罪悪感でいっぱいになる。
虫のいい罪悪感だと、私は思った。

すかさず私も一つ食べる。

「おいしい、本当に」

春ちゃんが微笑んだ。

味なんてどうだってよかった。
だけど本心からの言葉だった。
おいしかった、本当に。

その夜は冷え込んだ。
帰り道が冷たかった。

商店街はほとんど店じまいしてしまっている。
初老の夫婦がこちらに見向きもせず、シャッターを下ろしている。
ところどころにぽつんぽつんと立っている外灯が、私と咲子を不安定に照らしていた。
本当はこんな奴らのためにエネルギーを消費したくないんだ、と外灯が言っているようだった。

二人の足音が商店街に響きわたる。
それから咲子の愚痴も。

「手伝ってくれるのはありがたいよ？でも新井くんさ、文化委員長だから責任感強いのは分かるんだけど、私を差し置いてあそこまで指揮出すことないと思うんだぁ」
「村上くん、肝心なところは今確認とる今確認とるって・・・」

「ミユキトリサ、ナカガイイノハワカルンダケド、チャントシゴトシテクレテルノカフアンダヨネ。ナレアイデイインカイニハイッタッテカンジダシ」

「コノゴロ、イワオセンセイニタイシテフマンガツノッテルンダ。ゼンブワタシニシゴトハオシツケ。ソリャナイデショ。ネェ？」

「アズサガイテクレテホントウニタスカルヨ。モシアズサガイテクレナカッタラッテカンガエルト・・・」

「そうそう、春ちゃんも・・・」

私は、はっと現実に戻ってきた。
春ちゃん？

もう少しで商店街を抜ける。
そうすれば、Y字型の分かれ道にさしかかって、そうすれば、咲子とさよならできる。

もう少し、もう少し。
心なしか歩調が速くなっている。

咲子が口を開く。

「春ちゃんが今日つくってきたクッキーさ」

まばたきをする度に、春ちゃんが瞼の裏に映る。

心もち首を傾げて、春ちゃんが私に話しかけてくる。

先輩、先輩。

「あのクッキーものすごく油っこくなかった？春ちゃんの叔母さん、もっとちゃんとつくり方教えてほしかったよねー」

先輩、先輩、鹿島先輩。

「というか・・・、あんなのつくる暇があるんだったらもっと仕事をこなしてほしいんだけどなー。胸焼けするし」

鹿島先輩、鹿島先輩。

「梓もそう思うでしょ？」

「・・・・・・うん、そうだね」

きゅっと目をつぶると、春ちゃんがぐにゃっと溶けた。
けたけた笑いながら。

先輩、先輩、鹿島先輩。
私のこと、裏切りましたね？

私は構わないんですよ、鹿島先輩ごときにどうされようが。

でもきっと、先輩はそうはいかないのでしょう？

これは春ちゃんじゃない。
私の邪気がつくりだした、幻影だ。

そう言い聞かせて、呼吸を整える。

咲子は相変わらずべらべらとしゃべり続けている。
私の変化なんかにはちっとも気づかない。

自分のことで忙しいから。

Y字に到着したころには、咲子もいくぶんか気が晴れているように見えた。

「じゃあ、今日メールするからー。明日楽しもうねー」

「・・・うん。じゃあ、明日ね」

一人になると、私は早速お決まりの呪文を心のなかで唱え始めた。

咲子は優しい。
優しい。
だってこんな私と一緒にいてくれる。
それが証拠。
優しい、優しい、優しい咲子。

そのとき、ふと耳元に吐息を感じた。

私は呼吸が出来なくなって、その場に凍りついた。

鳥肌が立った。
全身の毛が逆立った。

私の後ろに『この世の者ではない』者がいる。
直感的にそう感じた。

初めての経験だった。

次の瞬間には、もう何の気配もしなくなった。

私は恐る恐る振り返ってみる。
やはり誰もいない。

突き抜けるように、夜空が広がっていた。

思った通りだった。

顔中冷や汗の筋だらけだった。
足は痙攣していた。

なぜだろう。
なぜ魂を盗られなかったのだろう。

家に帰りたくて帰りたくてしょうがなくなった。
玄関で息絶えてもいいと思った。

私は走って、走って、走っていた。

コンクリートの歩道がぐらぐらしていた。
後ろへ、咲子と学校と文化祭と春ちゃんがぐんぐん流れていく。

気づけば大通りに出ていた。

ふらふらになりながら、周りにもはっきり聞こえるくらい息遣いを荒くして走る私を、通行人は不審な目で観ていた。

夜空で月が、私のことを嘲り笑っている。

色のない人

十一月も半ばになってくると、皆冬休みの計画を口にし出す。
それは信憑性のあるものもあれば、単なるぼやきに過ぎないものもある。

「クリスマスなんていらないのよー。うちは仏教なんだから」

それが近頃の咲子の口癖だ。

かと思えば、彼氏できないかなークリスマスだものー、なんて言っているときもある。
もう支離滅裂だ。

そんなとき、編入生がやってきた。

中学生だったころは、転校生なんて割りとしょっちゅうだった。
高校になって途中から入ってきたのはきっと彼が初めてだ。

新しいお友達が男だと知って、心なしか咲子は浮き足だっていた。

「ねー転校生さ、何組だったっけ？」

昼休みに私のクラスにやってきて、咲子はそう言った。

私は首をひねった。

転校生になんか興味がなかったので、クラスなんて知らなかった。

「ねー転校生さ、B組らしいよー」

次の日の昼休み、咲子が自力で答えを探してきて私に教えてくれた。

「ね、梓、見に行こうよ」

「えー、私はいいよ。Bなんて、微妙に遠いじゃない」

「いやよ、一緒に行こう。ちょっとだけ、ほら、かっこいいかもしれないじゃない」

咲子がこんな風に男にがっつくのは珍しい。

仏教派の咲子は、よっぽどクリスマスを一人で過ごしたくないのだろう。

B組に着くと、咲子は私が名前も知らない男子を手招きして呼んだ。

「武藤、転校生どれ？」

武藤と呼ばれた男子は、教室を振り返って探した。

「ほら、あそこ。窓際一番後ろ」

昼休みだというのに、彼は机に突っ伏して眠っていた。
顔なんて分からない。

色素が薄いんだな、と私はぼんやり思った。

髪の毛は茶色がかっていた（もちろん染めた色ではない）。
学ランから突き出した手は、透明と言いたくなるほど白かった。

少し長めの髪からのぞく耳たぶは、赤に近いようなピンク色だった。

「うー・・・ん。顔分かんないなー。ねえ、あの人かっこいい？」
爪先立ちしながら、咲子が聞いた。

『武藤』の顔が曇った。
「顔はね、綺麗な感じだよ、どちらかというと女顔。・・・でもあいつちょっと変なんだよな」
最後の方は心なしか声を落とし、顔をこちらに近づけた。

『武藤』のタレ目に好奇の色が浮かんでいるのが、この距離からよく分かる。
この瞳、よく知ってる。
誰かを虐げて自分を守るときの光だ。
いや、光というよりむしろ闇だ。

失礼なことに、この人なんだか気持ち悪いと思ってしまった。
他の皆も『武藤』と大差ないというのに、この頃私はどうかしている。

「変？」

「なんか・・・誰ともしゃべらないでいつも一人でいるからさ、まあ主に渡邉とか大平とか、結構頻繁にあいつに話しかけてやってたんだよ。」

話しかけてやってた、か。

『渡邉』や『大平』や『武藤』は、どのくらい優しいのだろう。

「でも、基本無視。愛想笑いは一切なし、事務的な会話にしか返答しない。近寄ってくんなって顔してる」

咲子は私の横でかなり引いていた。

そんな面倒くさい男の子と、恋仲になるなんて考えられなかったのだろう。

でも、私はむしろ逆だった。

優しい人に媚びることで自分の居場所を確保しようとする私と違っ

て、彼には『自』があるような気がした。
無敵だと思った。
たったそれだけのエピソードを聞いただけで、尊敬してしまった。

『武藤』の後ろで彼がゆっくりと起きあがった。

「お、お目覚めかな？」

咲子の表情から自分のもくろみが上手くいったことを確信した『武藤』が、余裕の表情を声に滲ませて言った。

彼はゆっくりとこちらを見た。

咲子と『武藤』は慌てて目をそらした。
でもそれは決して本当に慌てていたわけではなく、小さな子供がいたずらの完成度に惚れ惚れしているようなクスクス笑いが含まれていた。

私だけが、彼から目を離せなかった。

長いまつげに縁取られた目が、私を捕まえて放さなかった。

彼は笑っていた。

こころ

遠のいた意識を戻すと、頭が一瞬ぐらっとする。
そのまま頭部だけが落ちてしまうのじゃないかと疑ってしまうくらい。

初めて私が鬱を本格的に体験したのは大学にあがってすぐだった。
その日、ものすごい勢いで雨が降っていた。

この辺りの地域一体に津波注意報が出ていた。
そんなの、どうでもよかった。
そのまま海のもくずになってもよかったんだ、私の場合。

そのときもちょうど今みたいに頭がふらついた。
気持ち悪いくせに、自分の顔が足元に転がっている妄想を何度もした。

喫茶店ではよく分からないＢＧＭが汚い店内に流れ続けていた。
コーヒーはすっかり冷めてしまっている。
カップの中で哀愁たっぷりに死んでいた。

客が何人か入れ替わってるのに気づいた。
不愉快な音を立て続ける客が消えていて、かわりに私と同い年くらいの女性二人組みがひっそりとおしゃべりをしていた。

皆なんでここにいるんだろう。
多分私が一番いてはいけないのだろうな。

そう思うと悲しくなった。
顔の筋肉がぴくぴくする。
力を抜けば間違いなくまぬけな顔になって、泣き出してしまうに決まっている。

彼の名前は、奇妙なことに思い出せない。
私と彼は違う大学に進んだし、彼が卒業後どうなったのかも私は知らない。

彼は最後まで友達の全くいない人だったから、たまに同級生に会うことがあっても彼の話になんてなったことなかった。
皆、咲子のことは必ず会話に出してくるくせに。

でもいつだって私だけは彼の記憶に触れなければならないのだ。
そうしてこれからも生きていくのだと思う。

雨の日は、泣きそうに、死にそうになりながら。
もしかしたら彼は人間じゃないのかもしれない。

井の中の蛙、大海を知りつつ

いやなことなんて一つもない。
クラスメートとはそこまで親密な付き合いはないけど、決していじめられているわけではない。

何一つ不自由もない。
この世界は自由の塊だ。

それなのに、一瞬たりとも満ち足りた気持ちでいれないのはなんでだろう。

トイレの個室でぼーっとしているといつの間にかこんなことを考えていることが多い。
目が覚めると常に自分の思考に嫌気がさす。
そうして壁のシミを数え始めるのだ。
少しずつ気持ちは落ち着いていく。

遠くから数人の女子の笑い声と足音が近づいてくる。
そんなときいつも身構えてしまう。

女子がトイレに入ってきた。
私は個室で息をひそめる。

女の子たちの間にすべすべと会話が流れていく。
その中に咲子がいた。
私はさらに身構える。
全身の毛が逆立つほどに。

話の内容はとりとめのないものだった。
あの先生の噂ばなし、好きな男子のここがいいところ、最近テレビで人気のアイドルグループの批判。

「ねえ、咲子なんで鹿島さんと一緒にいるの？」
誰かがそう聞いた。
急に自分の苗字が出てきて、私は心臓が大きく波打った。

「えー、鹿島さんって誰だっけ？」
「えっと、F？鹿島さんF組だっけ、咲子？」

「ううん、Ｅだよ」

咲子の声。
私と話しているときとは、少し違うように感じた。

「そうだっけ？なんか委員会してる人」
「そうなの？Ｅは知り合いいないからなー」

「ああ、あの・・・なんか特徴ない人？」

大した陰口を叩かれているわけでもないのに、もう涙が出そうだった。
膝のところでスカートをぎゅっと握りしめる。
ざらざらしていた。

「咲子と鹿島さんが一緒にいると・・・、なんかちょっとちぐはぐな感じがするんだよねー」

好奇に満ちた声。

『武藤』と一緒だ。
皆自分より下の層にいる人間を見つけ出していたぶるのを生きがいにしている。

咲子がふふふっと笑う。
ふふふ、梓はしゃべったら楽しい子だよ？皆も話してみたら分かるよ。

ああ、そうなの？と名前も知らない子が言って、私の話は終わった。
咲子が思ったような反応をしなかったから、皆肩すかしを喰らっているに違いない。

それからまた世間話を少しして、彼女たちは出て行った。

トイレに再び静寂が流れ出して、私は自分の居場所を取り戻したような気がした。

咲子の真似をして、個室の中でふふふっと笑った。

咲子が私のことを悪く言わないのを、私はなんとなく知っている。
その理由もなんとなく分かっている。

それが咲子が目指すビジョンに反する行為だからだ。

個室から出た直後の私は、まるで乳幼児のようにおどおどしてしまう。
急に世界が広くなったように感じるのだ。

放課後のグラウンドからは、野球部が練習にいそしんでいる声が聞こえてくる。
電気も点いていない女子トイレは、まるで井戸の中みたいだ。

なんてみじめなんだろう。
ぐすっと、顔は濡れていた。

猿知恵

咲子が芸能人の離婚話でもするかのように軽やかな調子で言った。

「ほら、例のB組の編入生、軽くいじめられてるらしいよー」

あれはまあ、自業自得だよねー。

ジゴウジトク。

『いじめ』はどの辺りから重くなってくるのだろう。

その翌日、休み時間に廊下で彼が不良グループにからまれているのを見た。

彼は涼しい顔をして、それを受け流していた。

私が初めのうちに抱いていた彼への尊敬の念は、恐怖に変わっていた。

あの、顔を見た瞬間に。

目と目があった、あの瞬間に。

小さな頃に、ホラー映画を見て夜トイレに行けなくなってしまったことがある。
それによく似た恐怖だった。

彼で遊んでけたけた笑ってる不良たちが、無能な猿のように思えた。
願わくは、犠牲になるのが私ではなく彼らでありますように。

それからすぐ、あっという間に彼を使って楽しもうなんて輩はいなくなった。
皆が彼を避けるようになった。
『いじめ』という意味の『避ける』ではなく、皆が青い顔をして懇願するように。

声にして呼びかける人は一人もいない。
でも、本能が悟ったのかもしれない。

あいつは本気でやばい、と。

帰路示されど

「鹿島さん、寺さんのこと嫌いなんでしょう？」

ぶおっ・・・と冷たい風がこちらに吹いてきたような気がした。

今日は、何も困難などない日だったはずなのに。

今から生徒会室にこのプリントを届けにいって、それから咲子と一緒に帰って、そしてまたいつもと同じように咲子の愚痴を少し聞いてあげれば、すーっと安らかに終わるはずの普通の日だったはずなのに。

階段においた右足は石のように動かなくなってしまったし、プリントの上二、三枚は私の腕からこぼれて足元に堕ちてしまっている。

彼が、彼が階段の踊り場からこちらを見下ろして微笑んでいる。

孤独の道化師、夢をみる

あれよあれよという間に一月。
今月は大切な行事がある。

予餞会（三年生を送りだす会）だ。
この会において、広報委員はそれほど重大な位置にない。
しなくてはならない仕事は、全ておつかい程度のお手伝いだ。

予餞会の終わり、それは私たち二年生広報委員の引退を意味する。
これさえ無事に終わってくれれば、もう咲子が他の生徒会メンバーに対して不満を持つこともなくなるのだ。
きっと咲子の中にたまるものも、すっと消えてなくなるに違いなかった。

私の役目も。
そうなると、何かがどうにかしてしまうのだろうか。

真冬のグラウンドは雪が積もっているわけでもないのに、白とし

か形容できない。
その濃い白を見て、私はびくびくしながら生きていた。

彼は知っていたのだろう。
私の全て。

「嫌い・・・。うん、少し違うな」

呆然と立っている私を見ながら、彼は大変幸福そうだ。
人差し指を突き出してぴっぴっと振りながら、階段を一段、また一段と下りてくる。
一歩、また一歩と近寄ってくる。

「全身で拒絶している感じかな?・・・ん、生まれてきたときから二人は会うべきじゃない運命だったのに、どうだろう?」

目がちかちかして何も見えなかった。
顔の筋肉は機能を放棄している。

「・・・何を言っているの？」

大して考えもせずに出てきた言葉だった。
自分の口から発せられた音は、この上なく弱々しく、みすぼらしく、からからと耳に届いた。

その瞬間、消えてなくなってしまいたい衝動に駆られた。

足元のプリントをかき集め、階段をかけ上るという一点だけに集中して、私は彼の脇を追い越した。

彼の目線が頭に突き刺さり、途中で気を抜くと倒れてしまいそうだった。

この段差を越えた先が大空だったらどんなによいだろうか、と訳の分からないことを思っていた。

その続き

上っても上っても景色が一向に変わらない。
ももを出来うる限り激しく上下運動させて階段を蹴り上っていると、
段差がこちらに迫ってくるように感じた。
無機質で固くて、冷たい壁。

三階まで上り着いたところでどっと疲れが込み上げた。
思わず手すりにしがみついた。
頭がくらくらしている。
遠くからトランペットの音色が聞こえてくる。
あ、音をはずした。

人影も見当たらないので、意味もなく廊下をじぐざぐに歩きながら生徒会室に向かう。
目の端で髪の毛が揺れる。
邪魔だな、どうしてこんなに伸ばしたんだろう。

生徒会室は活気だっていた。
実行委員の主要メンバーがラストスパートをかけて打ち合わせに励んでいる。
あと三十分もすれば卓上リハーサルが始まるのだろう。

その異様な熱気を帯びた教室の外で、咲子は後輩たちとのおしゃべりに夢中だった。
くるんとしたまつげに縁取られた大きな目を見開いてうなずく姿は、喜劇女優さながらだった。

私に気が付いて微笑む。
にっこりと。

皆違うんだ、私とは。
皆のん気だな、いいな、いいことだ。
苦しいのは私だけか。

お別れ

辺りはふんわりとオレンジ色をしていてやわらかい。
太陽がどこか遠くの方で揺らめいている。
さようなら、ありがとう。

咲子は何の話をしているんだろう。
咲子の声が、鼓膜まで届いてこない。

私たち二人の姿は周りにはどんな風に見えているのだろうか。
ごく普通の女子高生二人組みが、仲良しこよしの二人組みが、学校の話でもしながら下校しているように映っているのだろうか。

息がつまった。
もう絶え絶えだ。
一人になりたかった。

「でも皆、いいところだってあるよね」

すっと空間に切り込みを入れる如く響いた、異形の言の葉。
それが自分の声だと知ったのは、数秒経ってのちのことだった。
笑いそうになった、くつくつと。

急にこちらの世界に戻ってきたかのように、音がクリアに聞こえ始めた。
なのに咲子はしゃべらない。
私の足が前に進むのに合わせて、咲子の足もどんどん前に進んでいく。
それが私の視界の下の方に、ちらちらと入ってくる。

なのに咲子はしゃべらない。

私は全く焦ってなかった。
だってY字は目の前だから。

「じゃあ」

お別れの場所で、咲子はいつもの声の調子で私に言った。

「でも全くの善人もいないよね」

そう小声で付き足して。

私はもうこのときには気づいていたのかもしれない。

咲子にも、私にも、それらは言えるのだということに。

私の痛み、あの子の痛み

からんからんという音とともに、私は喫茶店を後にした。
後ろから「ありがとーございましたー」という気の抜けた店員の声が聞こえた。
私のほうに顔も向けずに、彼女はまるで呪文のようにそれを呟いた。

咲子だって、きっと苦しんでいたんだ。
思い返してみれば。
私は今頃になってからそのことに気づいた。
あまりにも遅すぎる。
私はいつも腑抜けなのだ。

雨は止みそうにない。
それほど勢いがあるわけではないけど、私の今日一日にこの雨はひっそりと影を落とし続けるだろう。

紫色の折り畳み傘を取り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1395k/

リトル・チルドレン

2010年10月10日22時23分発行